

日本語指導におけるICTを活用した広島市内A小学校の実践

－「個別最適な学び」についての考察－

二宮 孝司

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

公立学校に在籍している外国人児童生徒数は10万人を超え、日本語指導を必要としている児童生徒数はこの10年間で1.5倍と激増しており、そのうち2割以上が日本語指導などの特別な指導を受けることができていない。2021年1月の中央教育審議会の答申において、「令和の日本型学校教育」が打ち出され、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が今後の学びの方向性として示された。「個別最適な学び」では、多様な子どもへの学びとして外国人児童生徒への対応が挙げられている。また、2021年度内に、GIGAスクール構想によって各教室に一人1台端末と高速大容量の通信ネットワークの環境が整備された。これらの教育改革の中で、外国にルーツをもつ児童に対し、ICTを活用し、主体的な学びに導く創造的な指導方法の開発が求められている。本稿では、10年前より、ICTを活用した日本語指導（教科指導も含む）の実践を行ってきたA小学校の取組を取り上げ、その成果の再確認と今後の指導方法の可能性について論じていきたい。

キーワード：日本語指導、ICT、GIGAスクール、令和の日本型学校教育、個別最適な学び

1 学校教育における日本語指導の位置づけ

（1）「令和の日本型学校教育」の目指すものと日本語指導の在り方

近年、教育施策が立て続けに打ち出されている。学習指導要領（平成29年公示）の改訂に続き、令和3年1月には中央教育審議会の答申が出された。そこでは、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して、「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現」が強調されている。

この背景には、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0」の到来や新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」を子どもたちが生活していかなくてはならない現実がある。また、学校教育の直面する課題として、教師の長時間労働勤務による疲弊、教員採用倍率の低下や教師不足の深刻化、さらに、少子高齢化、人口減少による学校教育の維持とその質の保証に向けた取組の必要性が挙げられるが、何より大きいのは子どもたちの多様化である。具体的には、特別支援教育を受ける児童生徒や外国人児童生徒の増加、貧困、いじめの重大事態や不登校児童生徒数の増加などである。このような課題に対し、2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」がキーワードとして挙げられている。これらの目指す姿

と日本語指導の今後の在り方の関連を考えてみたい。さらに、コロナ禍のニーズと相まって、GIGAスクール構想として、約4千億円が予算化され、2021年度には全国の学校現場に一人1台のタブレット端末が配備された。ICTを活用した授業づくりと日本語指導の関連についてもふれることとする。

① 「個別最適な学び」と日本語指導

多様な子どもとして挙げられた外国人児童生徒等の増加に対する「個別最適な学び」とはどのようなものであろうか。ここで言葉の整理をしておきたい。本稿では、これ以降「外国にルーツをもつ児童生徒」と呼ぶこととする。日本語指導を必要とする児童生徒は、外国籍児童だけではないためである。広島市に多い中国残留邦人の3世、4世のように日本籍ではあるが、家庭内で主に使われる言語が両親どちらかの母語である中国語のケースも少なくない。一見、日本語を話せるように感じられる児童生徒の中には日常生活に必要な「生活言語」は十分でも、教科の理解につながる「学習言語」の獲得が不十分なケースが多い。このようなケースも含めて、まさに多様で一人ひとりの背景はさまざまである。

「個別最適な学び」には、「指導の個別化」と「学習の個性化」という2つの側面がある。

i) 指導の個別化

基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するため、支援が必要な子どもにより重点的な指導を行うことにより効果的な指導を実現したり、特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行ったりしていくことである。日本語指導において、まさに重点的な指導については、日本語学習教室での「取り出し指導」や各学級での支援としての「入り込み指導」があてはまる。また、指導方法・教材の柔軟な提供・設定も、教育課程編成において、大胆かつ柔軟な発想と手立てが必要となる。後述するA小学校の実践の中にヒントが隠されている。

ii) 学習の個性化

基礎的・基本的な知識・技能等や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子どもの興味・関心等に応じ、一人ひとりに応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子ども自身の学習が最適になるよう調整することである。つまり、子ども自身が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことである。「学ばせる」のではなく「学び取らせる」働きかけを行っていくことである。とかく、日本語指導においては、語彙の習得、文型の理解など教え込みになりがちである。限られた時間内での習得には限界があり、一つの学びがより深い思考を伴い、幅広い運用につながるためには、主体的な学びが成立する授業でなくてはならない。さらに子ども自身が自己の

学びを振り返り調整していく力を育てることが大切と考える。日本語の定着や教科学習の遅れを、子ども側の課題に決めつけることなく、教師の指導性の問題として語られなければならない。

② 「協働的な学び」と日本語指導

「協働的な学び」とは、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探求的な学習や体験活動などを通じ、子ども同士で、あるいは多様な他者と協働することをさしている。その中で、一人ひとりのよい点や可能性を生かし、異なる考えが組み合わせたり、よりよい学びを生み出すことを目指していると言える。日本語指導において、1対1の指導だけではなく、複数指導を行うことがある。これは、教育効果を高めるためというより、日本語教員配置の少なさによるやむを得ない事情であることが多い。しかし、実態の異なる複数での学習が、互いの学びを高める「協働的な学び」を意図し新たな授業展開を生み出すことで、より意欲的、主体的なかかわりと深い学びにつながる可能性をもっている。また、取り出し指導を終え、在籍学級の中で学ぶ際も同様で、本人だけではなく日本人児童生徒にとっても、質の高い学びに結びつくことにつながると思われる。

③ ICTを活用した授業づくりと日本語指導

GIGAスクール構想の実現により、新たなICT環境の活用や少人数によるきめ細かい指導体制の整備を進め、「個に応じた指導」を充実していくことが可能となる。

「ICTを活用した授業づくり」が、「多様な子どもたちをだれ一人取り残すことのない公正に個別最適化された学びや創造性を育む学びにも寄与するもの」となり、日本語指導を必要とする児童など「特別に支援が必要な子どもたちの可能性も大きく広げるもの」となることが切に望まれていると言える。

日本語指導において、「モノ」や事柄と「ことば」をつなぎ認識を定着させるために大変大切な作業である。しかし、1人一台タブレットの実現により、身近な「モノ」を写真におさめ、具体的なイメージをより定着させることが可能となる。また、複数のものを比較したり分類したりする過程で、思考を深めると考えられる。

（２）従来の日本語指導の位置づけ

昨今の動向に対して、従来の日本語指導はどのようなものであったのであろうか。一言で言えば、内容や指導方法は、学校現場に任せられていたと言える。地域や学校の温度差が大きく、前述のように、特別な配慮もされない児童も多数いたのが現状であった。広島市において、日本語学習教室設置校の一つA小学校には日本語指導の必要な児童の割合が6割超と高く、5人以上の教員が配置されていた。その一方、対象児童数の割合が低い多くの学校では、教員配置がなかったり、あっても取り出し指導が十分保障されていなかったりしていた。この差は、中学校入学時に大きな差となって表れ、高校進学そして将来の人生設計にも大きな影響を与えていた。

近年になって、文部科学省からようやく課題解消に向けた事業の予算化や教育課程の中

への位置づけがなされ始めた。平成25年度に、「公立学校における帰国・外国人児童生徒に対するきめ細かな支援事業」が予算化され、翌年平成26年度には日本語指導の必要な児童生徒に対する「特別的教育課程」が位置付けられた。基本的な考え方として、学校は日本語指導の必要な児童一人ひとりの実態（日本語能力や学習履歴等）を踏まえ、個に応じたきめ細かな教育を行っていく必要があることが述べられている。広島県および広島市においても、日本語学習教室設置校を中心に、指導計画の作成及び学習評価の実施が指示された。また、広島市校長会においても、「合理的配慮」を勧案したユニバーサルデザインの学びは、特別支援教育だけではなく、日本語指導においても推進されなければならないと、ようやく協議され始めた時期でもある。このような動きの中で、平成30年度に広島市においてA小学校は日本語指導拠点校として位置付けられ、日本語指導コーディネーターが配置された。A小学校の日本語学習教室（^{注1}世界なかよし教室）は、その後、日本語指導実践を公開し、様々な実践の提案を行ってきた。

2 広島市内A小学校の実践① 指導体制の工夫と教科学習の内容

（1）指導体制の工夫

平成14年度は2人体制であったが、平成15年度以降、中国残留邦人関係者が多く来日し指導が困難となってきた。平成16年度は、6年生に5名の途中編入があり、教員が増員された。その加配により3人体制、4人体制と増えることで、指導の幅は単なる2倍ではなく、人数以上の効果を生んだ。

これは学校としても大きな転機となり改革が始まった。大きな改革の一つは、日本語指導教室のチーフと教務主任が兼務する体制を整えたことである。取り出し指導、入り込み指導をより効果的に行うために、日本語指導を最優先に時間割の編成を行うことができ、全職員への発信力も大きく、「一人ひとりの児童を全職員で育てる」という方向性が確立されるきっかけとなった。教務主任が日本語指導のチーフになるこのシステムは全国的にも例はなく、令和2年度現在に至るまで10名を数えている。「なかよしシステム」と呼ばれたこの体制では、週1回1時間程度午前中にミーティングの時間を確保し、学習体制の確認を行った。貴重な授業時間といえる時間を確保したのは、日本語指導には、本務者、臨時採用教員、非常勤講師、そして、その他の時間講師と様々な職種で構成されている。全員が揃う時間で、子どもの実態把握や指導内容の共有を図ることは、大変意味深いものであった。

（2）日本語学習教室における教科学習の内容

社会科および理科の学習内容

日本生まれの中国残留邦人3世4世への日本語の獲得を中心に行ってきた。2007年ころからは、高学年に児童が増え、中学校に向けて、教科学習の充実が必要となってきた。とりわけ、中国においては小学校段階で学習することの少ない社会科における地域学習や産業の成り立ち等と、理科における科学的認識等を、中学校入学時まで、身につけさせる

これは、理科においても同じで、日本語学習教室に実験器具を持ち込み、日本語指導や国語科と横断的に学習させた。これのもとになるものが、なかよしプランの理科編である。

[illegible]

2006		なかよしプラン(理科編) I 型				2007年2月22日					
第3学年「比較」		分類	第4学年「関連づけ」		分類	第5学年「条件」		分類	第6学年「多面的に」		分類
A 生物 と その 環境	生き物たんぽう		生き物のらし		受けるが育ちる生命		2 ヒトや動物の体		(1)アイウ		
	1 たねまをう		(1)イ	1 春のしぜん		(1)アイ	1 植物の発芽と成長		(1)アイウ		
	2 チウウをそだてよう		(1)ア	2 夏のしぜん		(1)アイ	2 動物のたんじょう				
	3 植物のつくりとそだち		(1)ウ	3 秋のしぜん		(1)アイ	3 ムダガのたんじょう		(2)ア		
	4 ちん虫をがそう		(1)ウ	4 冬のしぜん		(1)アイ	4 ヒトのたんじょう		(2)アウ		
5 植物の一生		(1)イ	5 生き物の1年間		(1)アイ	5 花かん美へ		(1)エ		3 生物とともに生きる	(2)アウ
B 物質と エネルギー	太陽の光でしらべよう		空気や水をとこめる		7 もののとけ方		4 水う液の性質		(1)アイウ		
	4 あたかさと太陽の光		(1)アイ	温度ものの変化		(1)アイ	5 てんびんとてこ		(2)アイ		
	5 電氣であかりをつけよう		(2)ア	6 ものの温度とあき		(2)ア	6 おもりが動くとき		(3)ア		
	6 じしゃくのふしぎをさぐろ		(3)アイ	2 電氣のほたらき		(3)アイ	おもりをふつたとき おもりをかへたとき		(3)ア (3)イ		
C 地球と 宇宙	太陽の光でしらべよう		空を見上げると		天気の変化		大地のようす				
	3 かげのでき方と太陽の光		(1)アイ	3 夜空を見よう		(1)アイウ	3 台風と気象情報		(1)ア		
				4 月や星		(1)アイウ	4 わたしたちの気象		(1)イ		
				5 冬の夜空		(1)アイウ	5 流れた水ののはたらき		(2)アイ		
				温度とものの変化							
			7 水のすがた		(2)アイ						

大単元としてとして位置づけよう

○ 理科の基本的な学び方や考え方を
つづかせる。

全14時間

単発的に取り扱う①

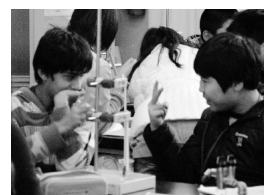
○ 日本語指導中の
○ 日常生活の中で
○ 季節・気候に応じて
○ 身近な自然環境の中で

単発的に取り扱う②

○ 視察・教材・模範・学習に生かす
○ インターネット
○ ビデオ

まとめたとして位置づけよう

○ 学級の授業の補充を配慮する
○ 取り込み指導
○ 取り出し指導



「なかよしプラン」によって、中学校入学までに必要な内容を効率的、組織的に配置できたが、別の課題が浮き彫りとなった。学習が受動的で、詰め込みの授業になりかねないことである。児童にとって「教えられる」から「学びとる」学習への転換が、日本語学習教室での授業づくりに求められていた。しかし、日本語学習教室では、大人の日本語指導のテキストを使い、大人への日本語指導を経験している指導者も多く、教師主導の指導法が中心であった。日本語指導が一定の方法で確立されただけに、授業改善は遅々と進

まないので現状であった。しかし、特別支援学級にタブレット端末が入り、実践協力校として授業改善をしたことをきっかけとして、世界なかよし教室でもタブレットを購入して、新たな授業づくりに取り組んだ。その例をいくつか紹介していく。

3 A小学校の実践② ICTを活用した授業の指導例

(1) タブレットを活用した指導事例

自信をもって学級で発表するために活用した事例 (国語科B児)

所属する学級の参観日で、国語科の発表をすることになった。学級で発表原稿の分担をしたり覚えたりした。原稿を正しく読めるようになかよし教室で練習を行った。校長室に、原稿の中に登場する場面(「校長室にはトロフィーがあった」)の写真タブレット端末のカメラ機能でB児自身が撮影して、意欲付けを行った。(写真1)



写真1

学級で立ち位置や、タイミングを練習した。なかよし教室で個人練習をする時にタブレット端末でビデオ撮影して、すぐにその場で、振り返りを行った。学級の練習で声が小さかったため、なかよし教室で練習をする時にタブレット端末でビデオ撮影をして、振り返りをした。声の大きさは自分ですぐに気づくことができ、意識的に大きな声を出そうとするようになった。話し方も適度な速さになり、聞き取りやすくなった。

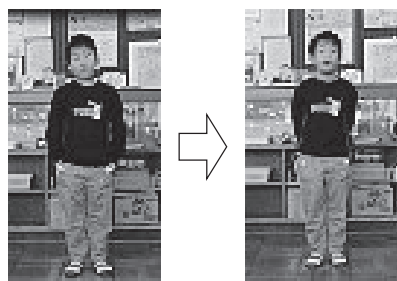


写真2

発表の態度(手がポケットに入る・よそを見て話す・身体が無意識に動いている)については、ビデオを見て気づくことはできたが、なかなか改善されなかった。すると、何度か練習したり、ビデオの再生で見たりしていた時に、「両手を後ろで持ったらよいのでは」と、自分で考え実行したところ、発表の態度がよい状況になりB児本人も喜んだ。発表会当日は、自信をもって、発表することができ、達成感を味わうことができた。(写真2)

(2) アプリを活用した指導事例

「いつ どこで だれと 何をした」を意識した作文のために活用した事例

(日本語 D児E児F児)

i) 使用アプリ及び内容・特長

＜Photo Dice＞

作文ゲーム「いつどこでだれと何をした」は、紙片に該当の言葉を書いて箱に入れ、くじ引き形式で引いて出た言葉を組み合わせて文を作るゲームである。これまでも、児童は現実にはないような文でできあがることを楽しみながら行ってきた。特に日本語学習では、ゲームとして楽しむだけでなく、助詞の使い方や時制に注意して文を

作ることに取り組んできた。一方で、既習の範囲内だけでは語彙が少なく、出来上がる文にも限りがあった。Photo Diceを用い身近な物事を撮影・利用することで、従来の紙媒体の文字だけでは思いつかなかったような事柄も取り入れることができ、児童がより興味をもって取り組むとともに、言葉の幅が広がる効果があった。

ii) 対象児童レベル

「こどものほんご」第7課までの学習を修了している児童

【既習事項】

- ・基本動詞述語文「(…を) ます／ません／ました／ませんでした」
- ・移動を表す動詞文「…へ 行きます／来ます／帰ります」
- ・動作場所を表す文「…で ～ます」
- ・共同行為者を表す文「…と／__人で ～ます」

iii) 目標

「出てきた絵や言葉をつなぎ合せて、助詞や時制を正しく使った文を作ることができる」

iv) 指導計画（全2時間）

第1時 サイコロの目にする写真を撮る

いつ・・・文字（非過去と過去，数字を含む語と含まない語が入るようにする）

どこ・・・学校内または校区内の場所

だれ・・・友達・先生の写真，人物・動物の絵

なに・・・動作の写真または絵

第2時 サイコロを振って，出てきた言葉（写真）をつなぎ合せ，文を作る

※数字のサイコロも作り，正しく文を作ることができたら，出た目の数だけ進むすごろく形式で行う

（3）協働的な学びの事例

児童個々が意識的に静かに学習するために活用した事例（国語科，算数科A児B児C児）

i) タブレット端末使用時間

日本語指導後の国語科，算数科の補充の時間

ii) 使用アプリ及び内容・特長

＜子ども静かにタイマー＞（写真3）

音を認識するタイマーである。音の感知度や計りたい時間を設定することができる。（写真3）画面の犬が，設定した音の感知度数を超えると，目覚めて激しく吠える。静かにして，犬を起こさずに制限時間が完了すると，賞賛の拍手の効果音が流れる。犬が目覚めて吠えると，残念さを表す効果音が流れる。音を感知すると，犬が目覚めそうな動き（耳をびくびくさせたり体を動かしたり）を示すため視覚的に注意を促すことができる。（写真4，5）



写真3

iii) 学習と児童の様子

3名の児童とも、大変興味をもった。犬を起こさないように、声の大きさを調節したり、時間中静かにしようとして努力をした。3名の児童は、犬を起こすことはほとんどなく、静かにすることを意識することができた。このアプリでは、故意に大きな声を出して犬を起こそうとする可能性もあったが、3名ともそのようなことはなく、利用することができた。



写真4



写真5

4 まとめ

世界なかよし教室及び特別支援学級における実践については、指導を試した段階であり、まだ不十分なことがたくさんある。しかし、タブレットを使い、様々な活用を試みたことで、指導上多くの効果を感じることができた。何よりも児童が、使いたいと思うこと、使うことで理解が深まり達成感を感じられたことが、大きな成果があったと言える。それは、自分が主体的にタブレット等にふれ、工夫をしながら学習を意欲に取り組むことに結びついたからである。また、それを協働で学ぶことで、理解の進度などの違いはあっても、逆にそれを互いに助け補い合いながら学びを進めていた。これからの発展として、考えられる例として、「単語カード」の作成が挙げられる。児童がその単語の示すものをタブレットのカメラ機能を使って撮り、絵カードを作ることで、より主体的な学びを生み出すことは、想像に難くないだろう。また、個別に取り組むよりも、グループでの学習に結びつけることによる教育効果は、はるかに高くなることも想像できる。

さらに、言語の基礎（「聞く」「話す」「読む」「書く」）において、視覚支援を生かしながらイメージをより豊かに深める手立てとなる学習は、学校全体で共有でき、通常学級での学習につながるものと考ええる。特別な課題をもつ児童に対してだけ行うものではなく、いかに一般化普遍化させていくか、つまり、学習活動全般でより有効に活用していくかということが問われてくるであろう。言い換えれば、このタブレット活用は、バリアフリー化からユニバーサルデザイン化への考え方の転換の大きな役割を果たすといえるだろう。

「令和の日本型教育」として示された「個別最適な学び」「協働的な学び」「ICTを活用した授業づくり」といった学びの方向性をいかに実践的に展開し、一般化していくかが大切であり、日本語指導の中にそのヒントが見いだされたと確信した。

注1 「世界なかよし教室」・・・平成18年度に「日本語学習教室」から「世界なかよし教室」と改名した。この教室では、「取り出し指導」や「入り込み指導」以外に、「全委員会」を設けている。これは日

本語指導の必要な児童の有無にかかわらず、外国にルーツをもつ児童全員に多文化共生につながる体験活動や母国や日本にルーツをもつというアイデンティティを育む取組を行っているためである。これまで子どもたちは「日本語学習教室へ行くことを「日本語」へ行く」といつていたが、平成18年度以降「なかよし」へ行く」と略して呼ぶようになった。さらに、日本語指導にあたる教員のことを「なかよしの先生」と呼ぶようになった。少しでも安心した居場所となり、外国にルーツをもっているのは、自分だけではなく仲間がいるというつながりも実感できるという願いを込めた名称である。

（参考文献）

- 伊藤泰郎（2013）広島市外国人市民生活意識実態調査」から見た現状と課題について
齋藤ひろみ（2017）外国人児童生徒等教育を担う教員の「加配」－制度を巡る諸問題－
齋藤ひろみ（2019）外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業 事例集
モデルプログラムの活用（日本語教育学会）
齋藤ひろみ（2020）外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業 外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための「モデルプログラム」ガイドブック（日本語教育学会）
末藤美津子（2017）多文化共生を目指した「チーム学校」の取り組み－カリキュラムマネジメントの視点から－
北山浩士（2022）．外国人生徒等に対する日本語指導指導者養成研修」講義資料
菅井陽子（2014）．外国人児童の「反周辺化」に関する試み－中国人集住地域における小規模校の事例研究－ 広島大学大学院
瀬川 大（2013）．新学習指導要領下で多文化共生に向けた教育を行うために
広島市（2005）．「広島市外国人意識生活実態調査」広島市市民局人権啓発課多文化共生担当
広島市（2015）．「広島市外国人意識生活教育実態調査」広島市市民局人権啓発課多文化共生担当

（参考URL）

- 独立行政法人教員研修センター「外国人児童生徒等に対する日本語指導指導者養成研修」
<http://www.nctd.go.jp/centre/training/urgency06.html>（最終閲覧日 2022.1.26）
法務省（2013）「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表」
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html（最終閲覧 2022.1.22）
文部科学省（2022）「学校基本調査」
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1329235.htm（最終閲覧日 2022.1.22）
文部科学省（2022）「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/04/1332660.htm（最終閲覧日 2020.12.12）
文部科学省（2022）「日本語指導が必要な児童生徒に対する指導の在り方について：審議のまとめ」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/05/1335783.htm（最終閲覧日 2022.1.19）